
ネットゲアの世界よ、ようこそ！(仮題)

ReiLei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネットゲエの世界よ、ようこそ！（仮題）

【Nコード】

N1926Z

【作者名】

ReiLei

【あらすじ】

日常をゲームが侵食する。

悠早はある朝、起きるとプレーするネットゲのキャラクターになっていた。

目覚めた世界は異世界でも、ゲーム内でもない、いつもの日常そのものであるように世界最大のVRMMORPGである『The World』を動かす人智を超えた未知の基幹システム、イグドラシルの暴走から全ては始まる。

別に2次創作ではないです、タイトルが思いつかないのは仕様です。
拍手メッセージには活動報告で回答します。
主人公は最強ではありません、むしろ周りがやたら強い。

その日の朝も、随分と冷え込んでいた。

朝8時過ぎということもあって気温はいつものように一桁前半。そもそも日中帯ですら二桁になることはない、そんな日が続いている。

この部屋は分厚い断熱材や2重窓などの北国も真つ青な過剰装備しかし、暖房を入れていないのだから、それなりに寒さには強いはずなのに外と大して変わらない程度に寒かった。

暖かな廊下からドアを開けた途端に流れだしてくる冷氣に彼女は身を震わせる。

肩下で切り揃えた、今時珍しいコシのある黒髪。

猫のような少々つり目気味な目が性格に反して、キツめの印象を与えている。特徴らしい特徴のない、それでも可愛いかわ愛くないかと言えば、それなり以上には可愛い部類に入る。それなりに恵まれてはいても、贅沢を言えば『もう少ししおらしい顔立ちのほうが良かった』と、彼女はそんなことをいつも思う。

そして、どちらかと言うと穏やかな性格の父親に似て大人しい印象の兄を羨ましく思う。

「せめてタイマーくらい入れておきましょうよ……」

エアコンが付いているというのに、まともに活用されていないことを嘆く。

ベッドの上に無造作に置かれているリモコンを操作して起動する。流れだしてくる暖かな空気が心地よかった。

「兄さん、いい加減起きなさいよ。聞いている？」

彼女の声に反応して、ふかふかの羽毛布団がもぞもぞと動く。

「あと10分……いや30分」

彼女はまどろみの中で毛布に包まれて、お約束のように呟く声にただ呆れる。

聞き慣れているようでどこか違和感のある、いつもよりどう見ても音程の高い声に奇妙な違和感を感じ取る。結子の兄である悠早は男性としては少々音程の高い声の特徴であった。しかし、毛布の間から漏れる声は、それよりも更に高い。

まるで、女性のような澄み切った柔らかな声音。それは割りと彼女にとっては聞き慣れた声。

「なんで伸びるのかなあ……って、え？ え？ うん？ あれっ？」

彼女の目が羽毛布団と毛布の隙間から覗いている、余りに長い淡い青みがかった銀の髪が存在を見つける。

明らかに日本人のモノではない髪。

それも恐らく、女性のものだと彼女は断言できた。

「……………えっと、これはどう理解すればいいのでしょうか？」

頭をフル回転させても思考がまるで追いつかない。

彼女は様々な可能性を思い浮かべては、それを片っ端から否定していく。

（まさか兄さんが女の人を連れ込むとか……それはないですね、うん）

それこそマンガやラノベじゃあるまいし、と思考を打ち消す。

(でも、さっきの声って……ないない、ありえない、ありえない)

その声は明らかに聞き覚えがあった。

いや、むしろよく馴染みのある声。毎日のように、下手をすると現実時間よりも遙かに長く聞いている声。高すぎず、低すぎず、派手さはないけれど、澄んだ不思議と良く通る優しい声音。相変わらず無駄な凝り性だと最初は思わず笑ってしまった記憶すらもあるそれ。聞いているとなぜか癒されてしまうような、そんな声。

しかしその可能性は彼女は真っ先に否定していた。

それは常識的に何よりも有り得ない。

まるでゲームかマンガでしか起き得ない、そんな荒唐無稽な話。

「ゆい、10時までには起きるよ……」

悠早はスロー再生するようにそれだけ呟く。

そんなだらしのない様子に盛大に溜め息を吐く。

(いや、今すぐ起きようよ……むしろ叩き起こすべき?)

彼女は大きく息を吸う。

そして吸い込んだ空気の全てを一気に吐き出す。

「兄さん、起きなさい……!」

怒鳴り散らす小うるさい母親のように声をあらげる。

そして同時にお約束のように掛け布団と毛布の隅を掴み、バサッという小気味良い音と共に安住の地を奪い取る。勿論、申し分程度に引き剥がされまいと言う抵抗もあった。

ささやかな抵抗も全く無意味である。

「ひゃっ!?!」

まだ冷たい外気に触れて、なんとも可愛らしい声が漏れる。

結子はベッドの上で文字通り猫のように丸くなっていている割りと見慣れた『兄』の姿を微笑ましく思う。そして、『どうしてこうなった?』と問いかける。

その疑問に対する答えはどこからも返ってこない。

人間驚きすぎるとかえって冷静になるらしい。

彼女はそんなことを考えながら、兄であったものの頭から細く長い指の先へ、髪の毛の先、爪先までを繁々と眺める。

不健康なほどに白い肌は血管すらも浮いて見える。

長い髪の毛の色は全体としては銀。

強く光を浴びている部分は淡い青紫。

朝日を乱反射して不思議な輝きを放つ髪に思わず見とれる。

(相変わらず無駄に可愛い……じゃないって)

結子は何度か深呼吸する。

ずいぶんと細く小さくなった肩を揺すりながら叫ぶ。

「……………え、え、えーっと、とりあえず起きて、どうなってるんですっ?」

「ゆい………朝から騒がないで欲しいんだけど……………」

低血圧にはこの寒さは辛い」

「そう言う問題じゃなくて!! 非常事態、エマージェンシー、メ

ーデー!メーデー!」

別に今日は労働者の日ではない。

「うるさいから……脳に響く」

悠早はと言うと呻きながら枕に顔を深く埋める。

そしてモゾモゾと手で結子の手を払いながら、行儀悪く奪い去られた毛布を足で引き寄せようともがく。

すると長い髪が乱れ全身をくすぐるように蠢く。

「ゆい、髪くすぐつたいからやめて、ほんと」

結子は仕方がない、と呆れ気味に肩から手を離す。

「だーから……」

寝返りをうち、2度寝を決め込もうと悠早は身体を動かす。

そんなことをしている間にも妙な違和感が積もって、彼の思考に警鐘を鳴らす。声の高さ、全身に触れる髪感触、何よりもベッドがいつもよりも随分と広く感じられること。

それが彼を眠りから覚まし、思考を急速にクリアにしていく。

「……………ん？ あれ？ へ？」

悠早はムクリと重い身体を起こす。

ずいぶんはつきりとしている意識に比べて、目覚めを拒否しているような重い瞼を擦る。周囲を見渡し、飾り気のないデジタル時計で今日の日付と現時刻を確認する。

小さく1度だけ頷く。

そのまま視線を天井のシーリングライトから本棚へと這わせる。

最後にロッカーの扉の姿見を見て固まる。

何度も瞬きをして目をゴシゴシと擦る。

「……………え」

啞然とした表情のまま、頬をつねる。

そんな兄の様子を見ながら結子は窓の外へと視線をそらす。

「えっと、何これ？」

「だ、か、ら、メーデーだって言ってるじゃないですか……………」

二人の会話はそこで途切れる。

ただ、鏡の中にはファンタジーの世界からそのまま飛び出してきたような美少女がいた。

美人というにはまだ幼さの残る、そんな可愛らしい顔を歪ませて。

目が覚めたら『女の子』になっていました。

そんな異常事態にも関わらず、二人はそれなりに落ち着いていた。少なくとも泣き喚くことも、錯乱状態になることもなければ、オロオロと混乱してしまうようなことも不思議となかったのである。むしろ、いつものように濃く入れたアッサム茶葉を使用して、シナモンで香りづけしたロイヤルミルクティの香りを愉しみながら、悠悠々と軽食を摂る位の余裕は持ち合わせていた。

悠早は背が縮んでしまったためにかなりダブダブになってしまっているパジャマ姿のまま、何をするわけでもなくブランチと洒落込んでいる。

結子も二人がやっているネットゲの掲示板を眺めながら阿鼻叫喚の様子を楽しんでいた。

「なんか事実は小説より奇なりって言うのかな、こつこつのを」

悠早は2杯目を注ぎながら悠長に、相当他人事の口調で呟く。

「兄さん、ずいぶん冷静ですね……」

「赤の他人になっっている、とか気づいたら異世界でした、よりはま
だいいんじゃないかな？」

「それはまた素晴らしいプラス思考ですね？」

程度の問題であるが、少なくとも慣れ親しんだ世界である事に彼
は安心している。

流石に異世界に放り込まれて、悠々と生きて行けるほど彼は自分
が 主に精神的な面で たくましいとは思ってはいない。それ
なりに極一般的な現代っ子だと、そう認識している。それ以前にサ
バイバル能力なんてものがあるようなアウトドア系の人間ですらな
い。

外見が変わったという程度なら、まだ耐えられる範囲の問題であ
った。

むしろそれなりに『慣れ親しんだ』外見であるのだから違和感
皆無といっても良かった。

「でも、掲示板を見てると、同じような状況の人が沢山いるよう
ですよ？」

「そつ」

結子はそんな『兄』の様子を見ながら恨めしく思っていた。

彼だけこつこつして『ゲーム世界』の外見を手に入れたというのに、
彼女はと言えば何も変化がなかったという事実。彼女自身、別に今
の容姿が嫌いなわけではなく、それなりに気に入ってはいる。これ

以上を望むのは贅沢だという思いもある。

それでも彼女が望む姿を実現した姿が現実でも手に入ればよかったのに、とそう思ってしまう。

そしてそんな思考をしている自分に呆れて溜め息を吐く。

「神様って不公平……」

無意識のうちに言葉が漏れる。

「それで、ゆい。今はどうなってる？」

余りにもスレの流れが早く、着いて行くのもやっとと言う状態。

それでも、断片的な情報から彼女は今起きている事象を整理していく。

「TWには昨日の午前2時頃から接続不能になっていて、運営は緊急メンテナンスだと言い張ってるそうぞ」

「緊急メンテナンス……ね？」

「はい、緊急メンテナンスらしいぞ」

悠早の得た容姿はとあるゲームのキャラその物であった。

そのゲームは通称は『TWO』又は『TW』と呼ばれる。

『The WORLD』

それは『真なる異世界を体感する』を謳い文句にしている世界的に人気の高いネットゲ。

それも世界中の100万を超えるプレイヤーが一つの世界を共有すると言う、この2032年現在においても非常識と言われるほどの規模を誇るVRMMORPGである。圧倒的な空気感とリアルさ、

規模などどれを取っても他の同種のゲームからは頭一つ二つ以上抜けた存在。

一部では『オーパーツ』とまで呼ばれる事すらあるシナモノ。

「この状況じゃなければそれで納得したんだけど……ね？」

二人は昨日、大規模なシステムアップデートがあった事を理解している。

そして、こんな状況でなければ大規模アップデートにつきものの『バグ』もしくは『不具合』への対処のための『緊急メンテナンス』で誰もが納得しただろう。

実際にはどう考えてもそれでは収まっていない。

ゲーム中のアバターの容姿が現実に反映されている異常事態、有り得ない状況。

少なくとも誰もその明快な原因は知りようもない。

「ですねえ……」

「ある意味不具合には間違いなさそうだけど……でも、美味しい」

彼は暖かな紅茶を、今という時間を精一杯に満たす。

結子は窓に映る彼女自身の姿と、変わってしまった兄を見比べて小さく溜め息を吐いた。

そのままタブレット端末へとそっと視線を戻す。

深夜2時。

普段は静かなオフィスが突如として、文字通りの意味で戦場と化していた。

鳴り響く電話と次々と上がるアラートの発する警告音に、彼は頭を抱える他ない。

一昨日の数年ぶりのゲームエンジンの刷新を含む大規模アップデートの後、何事も無くいつものようにバグ一つ、問題一つなく極めて安定して動作していた。

サービス開始以来、人為的なミスを除けば何一つ問題の発生しなかったシステムの突然の暴走。

それも今では完全に制御を失い、事態は刻々と悪化の一途を辿っていた。

僅か30分前、突如システム管理者ユーザ、つまり全システムにアクセス可能なroot権限の喪失。

それに続く、正体不明の多数のモジュール、機能の起動。

それが何を引き起こすか、根本的に何を司っているのかを誰一人知らない。

そもそもマニュアルすらも存在しない。

「それこそパンドラの箱でも開いたか……クソッ」

男は右手で拳を握ると、デスクにドンという強い音と共に叩きつける。

彼は30半ば、エンジニアとしては正に成熟期。

このゲーム、『T.W』こと『The WORLD』の設計・開発

から携わり、今ではインフラ部隊を率いるリーダーとして多くの部下を指揮する立場。社内ではゲームのインフラについては誰よりも詳しいと、俺にわからないことは他の誰にもわからないと、そう自負していた。

しかし同時に、彼はこのシステムについて『何も知らない』のもまた事実であった。

それを誰よりもよく理解していた。

「一体、何が起こった……………柳沢！ そっちはどうだ!？」

「どうやってもroot権限を取れませんよ……………それどころか数分前からログインすら出来なく!」

「西沢リーダー、フロントは電源を強制的に落としたと報告が入りました!」

その報告に一息つき、思わず肩から力が抜けかける。

しかし、直ぐに気を引き締め眼前に広がる数枚の有機ELモニタへと向かい直す。

「普通の機材なら電源ボタンを落とせばそれで終わる話なんだが……………忌々しい」

彼はサーバールの奥深くに鎮座する箱の姿を思い出す。

一般的なサーバ機器であれば、最悪の場合は電源ボタンを長押しするなどして強制シャットダウンを走らせることができる。それすらも出来ないような状況であれば、最終手段として電源コードをすべて引き抜いてしまえば そんな事態はまずありえないが それで良い。

実際に一般的なサーバで構成されていたフロントエンド系、つまりWebやログインと言ったサーバ郡は電源コードを全て引き抜くことで停止させた。常識的に考えれば有り得ないことであったが、

何故かシャットダウン系の命令を一切受け付けなくなってしまったため、いたための非常措置であった。

これで新規にユーザがゲームへとログインすることは不可能となる。

それだけでは何の解決にもなっていない。

しかしゲーム本体を動かしている機材を止める方法を彼は思いつかなかった。

(だから俺はあんなものを使うのはやめておけと最初に言ったんだ……言わんこつちやない)

TWを動かしている機材は一般的なサーバ機ではない。

それは出自不明、そもそも本来何に使われるべきものなのかすらもわからない。

それ以前に、そもそもこの時代の人間の知識の及ぶ範囲のモノですらもない。

宇宙人や未来人の未知の道具。

この時代にあり得ざるモノ。

人に過ぎたるもの。

オーパーツ。

そう呼ぶのが最も相応しいモノであった。

「原始人にライターを与えたようなものだな……ハハハハハ」

彼はただ、そう自嘲するしかない。

その様子を不審がった部下の一人が憔悴した表情で話しかける。

「西沢さん、あとはイグドラシルを落とせば……」

「不可能だ……あれは落とせない」

「……………はあ」

「今だから言うが、あれを落とす手順・手段は一切存在しない」

その言葉の意味を『理解出来ない』と言う表情と共に周囲の動きがピタリと止まる。

最初期からのごく一部のメンバーを除けば、中枢部であるそれについて知るものは殆どいない。

誰もが、それが何であるかすら知らずに触っていた。
それが現実だった。

「どういう事ですか？」

「そのままだ……あれは人知の及ぶようなものじゃないんだ」

その表情には次第に諦め、達観が混じりつつある。

彼から見れば、このゲームTWは正に奇跡だった。

そんなモノがこの6年と言う長期に渡って何の問題も起こすことなく動作していたのだから……それを奇跡と呼ばずに何と呼ぶだろうか。

大きさで言うと50センチ四方よりも小さい程度の純白の小箱。

精々10Uサイズに収まってしまっ程にコンパクトさ。

その中に、それは想像を絶するような……世界中のすべてのコンピュータが束になっても足元にも及ばない様な膨大な演算能力が秘められているモノ。彼、西沢がその昔に簡単なプログラムで計測してみたところ最低でも現在最速のスーパーコンピュータよりも三桁は高速という目を疑うような結果があった。

彼の予想によれば、それは『世界シミュレータ』の類である。

そう確信できるほどに仮想世界を実現するために都合の良い機能が揃っていたのだ。

「それは説明になってません」

「全くだ」

「……………」
いつもは冷静な、頼りになる上司の顔に浮かぶ複雑な表情が周囲をより惑わせていく。

そしてまるでそんな彼を嘲笑うかのように、システムは彼の画面”だけ”に次々と様々なメッセージを送ってくる。ただ彼を焦らせ、混乱させ、冷静な思考力を奪うように、そんな悪意すら感じさせる。明らかにそれがすでに彼の手を離れたということを見せつけているように見える。

膨大なメッセージが止まっては流れ、投げられては止まり消えていく。

断片的に得られる情報だけでも未知の機能が次々と起動している。

（見せつけているのか……わざわざ、人に判る言葉に直してまで！）

この機械は彼らの希望に応え続けてきた。

あれが欲しいこれが欲しいとそう願えば、その機能が実現される魔法の箱。

薄々ながらもそれが生きている、もしくはそれに意思がある事は少なくとも彼は理解していた。

「あの噂は本当だったんですか？」

「……………」

長い沈黙を破って、ゆつくりと言葉を紡ぎ出した部下に彼は何も答えない。

むしろ、沈黙をもってそれを肯定する。

「あれがどれを指すのかは知らないが、間違っではないだろうか」

急激に場の喧騒が、波が引くように周囲に伝染し収まる。

キーボードの打鍵音が止まり、喧騒が静まり、鳴り響く電話の音だけとなっていく。

彼はこの会社が潰れることは間違い無いだろうと、そんな些細な心配をする。そしてこの場にいる人間の大半は散り散りになって行く。中には再就職が難しい人間もいるだろうと、それも心配と言えば心配であった。

そんな顛末な事を憂いている彼自身に呆れる。

「すでに”あれ”は制御を離れた……何が起こるかわからない」

彼はそう呟いた。

平穏を破るように携帯の着信音が鳴り響く。

キッチンで洗い物をしている結子も珍しい着信に興味をひかれて振り向いている。

結子から見て悠早は人付き合いが嫌いで、友人も少なく、ワイワイガヤガヤと大人数で騒ぐのも好まない。知っている兄の友人と言え片手でお釣りが来るほど、電話をかけてくる相手となるとそれなりに名前が絞れてくる。

事実上は両親と一人だけだと言うことを理解している。

そして恐らく両親のどちらかだろうと彼女は想定する。

二人が中学に上がる頃から、揃ってSE、つまりシステム・エンジニアをしている両親は家に帰ってくるのも遅くなった。それだけならまだしも、デスマに巻き込まれて忙しい時などは月に数回しか

帰宅しない、下手をすると1ヶ月家に戻らない事もざらだ。

電話すらも滅多にかかってくることはない。

たまに電話があると思うと『今タイにいるけどお土産何がいい？』
と言うことも過去にあった。

暫く帰れないといって、3ヶ月も顔を見ないこともあった。

なかなか見事な放置プレーのお陰で、二人は揃って家事は一通り
できるようになっていた。

(今はどこに居るんだろう……)

結子はどこに居るかもわからない両親の事を思い出し、ふと心配
をする。

電話に出るのが心底嫌そうな悠早の表情に苦笑いが漏れる。

「誰だろう……？」

盛大に溜め息をつきながら、悠早はめんどくさそうに手を伸ばす。

そして、表示されていた名前に思わず後悔して、自然と連続で溜
め息が漏れる。

「……って、洋二か」

高校の同級生であり、悪友といっても良い間柄であり、それでも
中学以来不思議と縁の切れる事がなかった……そういう意味では彼
にとっては数少ないリアル友人の一人。しかし、その縁を間違っ
ても大切にしようとは彼は思っていない。

電話に出るべきか出ないべきかとぐるぐると思考を巡らせる。

どうせ『アキバ行くぞ！』とか、そんな程度のもだろうと予測
する。

名前を聞いた結子もその瞬間に興味を失ったようで、洗い物へと

戻ってしまつ。

「なんだ、高柳先輩ですか……」

「残念な洋二でした……」

悠早はそう呟くと遠慮無く、問答無用で通話を拒否する。
これも彼にとってはよくあることに過ぎない。

「兄さん、友達無くしますよ？」

「何でこんなに人間関係って面倒なんだろうね……」

「さあ、どうしてでしょうね？」

結子もまた同じようにあまり人付き合いが好きの方ではない。

そもそも、八方美人に愛想を振り撒けるような器用な性格を彼女もしていない。

争いは同レベルの間しか起きない、そんな言葉を思い出す。

「いいけどね……」

悠早のつぶやきを遮って、再び着信音が鳴る。

発信元は先ほどと変わっていない。

「高柳先輩がわざわざ拒否されてもかけてくるって珍しいですね？」

「なんだろうね……」

彼も諦めて通話ボタンを押す。

直ぐに耳元で響いてきた凶太い声に、何度目ともわからない溜め息が漏れる。

（何が楽しく朝からこいつの声を聞かないといけないのか……）

穏やかな午前中の時間の全てが、その存在のお陰で台無しという気分である。

『おい、悠早。今すぐ池袋のライブカメラを見る！！ とんでもないことになってるぞー!!』

「慎司……朝からうるさい」

その女性らしい高い声に沈黙が訪れる。

『つて、お前誰だよ！？ あれ、結ちゃんか？』

「悠早ですけど、何か？」

『……………はぁ？』

「もういいよ、もう」

説明することはおろか、話すことすら億劫になり、容赦無く通話を切る。

そのまま、すぐに機内モードを設定し全ての通信を遮断する。

その様子をしっかりと見届けた結子は、何かがツボに嵌ったらしくクスクスと必死に笑いをこらえている。

遊佐に近づくと、それがいかにも自然に隣に腰を下ろす。

「先輩はなんて？」

「池袋のライブカメラを見ろって？」

「？」

何かが起こっているらしいという嫌な予感が二人の意識に共通して流れる。

平常時ならばすぐに再生が始まるような、大して画質も良くないライブカメラの配信だと言うのに一向に再生が始まらない。自宅側

の回線には余裕があると言うのに、動画の読み込みに随分と時間がかかる。それ以前に配信サイト自体が余りにも重たい。

サーバ側の回線に相当な負荷がかかっていることは明らかだった。不安が募っていく。

「……………!?!」

「……………えっ?」

二人は揃って息を飲み、目を見開く。

言葉が出てこない。

余りにも衝撃的な光景がカメラを通して映しだされている。

街が壊れていく。

玩具や大昔の特撮のセットが破壊されるように、いとも簡単に、ゴミのようにビルが崩れる。大量のコンクリートが砕け、雲一つない空を粉塵が舞って覆い尽くしている。この時代から30年も昔の歴史の転換点となった、二人にとっては歴史でしかない911同時多発テロを思い起こさせるような光景。

余りにも無力で無慈悲な破壊行為。

映画か何かとしか思えないほどの非現実的さ。

その下にどれだけの人がいるのかなど想像もつかない。

数千、下手をすると死傷者、行方不明者は万を超えるかもしれないと二人は思う。

しかし同時にそれは創造的でもあった。

コンクリートで塗り固められた都市を粉碎し、成長を続ける巨大な影の存在。

恐ろしい速度で大地に根を張り、天高く伸びようとする大樹。

二人はそれがなんであるのかを瞬時にして悟る。

「世界樹《イグドラシル》……？」

02 (後書き)

補足

・デスマ

各所がいい加減なIT業界では、プロジェクトの終わりが近づくと特によくある事。

自家に帰ることも出来ず、現場に缶詰、月労働時間は300近くなることも？

開発系の人たち特に頑張れ、超頑張れ。

現在時刻は10時半過ぎ。

東池袋の外れに突如として出現した世界樹は成長を続けていた。言葉のままに、街を呑み込みつつある。文明の象徴である近代都市を易々と破壊しながら、天高く伸び続けている。ニュースによれば既に一帯は警察により封鎖され自衛隊の派遣が決定。多数の死傷者・行方不明者が出ているなど、現場は悲壮な状況らしい。

その高さは1000メートルを超えたとの報告すらある。今ではスカイツリーを遥かに抜いて国内最大の高さに達している。その偉容は、二人の住む港区の高層マンションからはつきりと眺めることができる。

そんな異常事態にも二人は意外と冷静だった。と言うよりも、慌てたところでどうにもならないと言うのが正しい。

TWについては未だに運営会社からの公式なアナウンスはない。問題のゲームサーバはダウンした状態を保ち、運営会社と揃って不気味な沈黙を貫いている。今はネットワーク的にも切り離されているようで、外部から現状を確認する術は皆無の状況だと言う。

この異常事態にも関わらずスレを見れば『早くメンテ終われよ』やら

『運営、金返せ』やらと中毒者達の罵倒雑言が溢れている。廃人様達にとってはゲームの方が遥かに重要なんだ、と悠早は苦笑いするしかない。そんな彼は彼で、ノートPCに向かって、ゲーム内の友人・知り合いと連絡を取っていた。リアル友人よりもネットの友人を重視する辺り、本人は気づいていないようだが大概である。

それは結子も大差はない。

「兄さん、それ、で」
「うん？」

結子は悠早の肩越しに画面を覗き込む。

昨日までなら現実ではまずあり得ないような距離感。

それでもT Wの中であればごく普通であった、そんな近い距離。友達同士と言うには少々近すぎ、そっちの人だと思われるかも知れない。兄妹と言うよりは、仲の良い姉妹。容姿はどうみても姉妹には見えないが。と言う表現がわかりやすい。

結子にはいささか季節外れのシトラスの香りが心地よかった。

これも慣れ親しんだモノ。

「今日はどうなったんですか？」

わざと耳に息を吹き掛けるように話しかける。

結子から見ると、悠早が耳元で囁かれるくすぐったさに必死に耐えているのが面白い。もっとも、このくらいでは悠早はゲーム内で慣れたもので反応に乏しいのが彼女の機嫌をほんの少しばかり悪化させる。

視線が会つと、悠早はクスリと微笑んで肩をすくめる。

「えっとね……、ティッシとめーちゃんは来るって言ってたかな？」
「ほうほう」

彼女もよく知る名前が上がる。

どちらも仮想世界内では、あまり一緒に遊ぶと言うわけではないけれど、悠早を通してそれなりに仲が良い。

何の話かと言えば、やけくそ気味の『OFF会』である。

要するに『リアル容姿が変わっちゃった記念』と言うノリの産物。

あまりの危機感のなさに結子は呆れるしかない。

しかし同時に何ともこの面子らしいとも思い、辛気臭くなくても仕方無いしねと一人で納得しておく。

彼女から見て『暇潰し』と言う点では悪くはない。

「二人とも外見変えられたみたいで、楽しそうだったかな？」

「はあ……それはまた怨めしいくらいに羨ましい話ですねっ!？」

今の私なら念力だけで人が殺せそうな気がしますよ、はい」

結子の瞳は微笑んでいるようで笑っていない。

静かな闘志、いや私怨に満ちたオーラに悠早の表情がこわばる。

「眼力じゃ？ って、そんな睨まなくても……」

「はあ……」

彼女は溜め息をつくとき、身体を悠早の背に預ける。

さりげなく左手を首に回してくるところに彼は恐怖を感じていた。

今の彼の身体は、仮想世界の身体能力が反映されていれば決して非力ではないはずである。現実的に考えれば細く柔らかい身体の何処にそんな力があるんだとツツコミが入るのは間違いない。

そもそも力が反映されているかどうかと問われれば、不思議と確信を持って『YES』と彼は答えられる。何故か身体がそう教えてくれるような気がしていた。

それならば、同時に結子もまた同じように仮想世界の力を得ている可能性が高い。

そうなった時は必然的に『ster』スキル値が低い悠早が不利である。

「ほんと神様って不公平ですよねぇ？」

「そつだねえ……じゃなくて、別にゆいは可愛いから良いじゃない？」

「私は欲深いんですっ！！」

結子の声が耳を通して脳に響く。

悠早はうんざりした表情に変わっている。

「わかったから、わかりましたから！」

「兄さんは、な・に・も・わかつてませんっ！！」

結子は首に回された腕にゆっくりと、加減しながら、それでも確実に力を込めていく。

少しでも楽になろうと、あわよくば振り払って抜けようともがけばもがくほど状況は不思議と悪化していく。ある人に仮想世界で習った拘束技術であるが、悠早が彼女がそんなものを使えることなど知るよしもない。次第に身体が動かせなくなり、固定される。

仮想世界ならまだしも現実だからこその恐怖。

悠早は次の行動をシミュレーションするが打開策は思い付かない。そんな表情が彼女の加虐心を刺激する。

「でも月曜からどうしようとか、色々悩みはあるんだから……」

「そーですねー」

「ティツシも会社辞めようかとかぼやいていたし」

「それは大変そうですねー」

結子は抑揚のない棒読みで返し続ける。

それに合わせるように、更に首の隙間が埋まっていく。

力加減を間違えれば窒息、下手をすると首が折れかねない。

「すごい棒読みだね？」

「気のせいです、オー、勘違い、みたいな？そう言う感じですよ」

気がつけば頬と頬が触れ合うほどに二人の顔は近い。

悠早は仮想世界でも滅多に無い程に近い、何だかんだで可愛らしい妹の顔を直視できず、ふわふわと視線だけを彷徨わせる。数秒から数十秒に1度、視線が交差するたびにニンマリと肉食動物的な微笑を浮かべて、何かを伝えたそうにしているのが見える。

そう、彼女はただじつと悠早を見つめ続けている。

彼女が何を考えているのか、何が言いたいのかはさすがに読み取れない。

(なんだろう……WISください)

どうやらテレパシーとか、そういう系統の便利な能力はないらしい。

結子は小さく溜め息をつく、痺れを切らして言葉を発する。

「ところで、私も着いていっていいんですか？」

「ティッシと一緒においでって言ってたよ」

あまりのどうでも良さに、悠早の肩から力がガクリと音を立てて抜けていく。

そんな彼の気も知らずにゆい子は鼻歌すら口ずさみそんなほど上機嫌になり、満足そうにコクリコクリと頷いている。しかし、悠早からするとその動きが頬ずりされているようで、何ともくすぐったくて仕方がない。

それでも、ある程度わかってやっていることだろうと振り払わない。

余計なことをして機嫌を損ねるような度胸は彼にはない。

「あの人は話がわかりますね、うん」

拘束が緩まり、締め付けが優しく包みこむように変わる。

(むしろ拒否する理由がないんだけどね……)

悠早は、自分たちがなぜ彼女……ティッシと呼ばれる人物とどうも仲が良いのかよく疑問に思う。

片や”いろいろな”意味で世界中に名を知られた、ギルドやクラウンに属さない独立系のトッププレイヤーの一人。方や、平均よりは上だけれど、それほど目立つような事もない一般人。普通に過ごしている限りは接点らしい接点はまず生まれえない、それ程の実力差がある。

同じ学校のプレイヤーや昔からの知り合いには七不思議の一つとまで評される。

(ああ、でもSOPのローンどうなるんだろう……流石にリアルマネーで払えとか言われたら泣くよ)

どうでもいい事を思い出しながら、そんな社会人をしている彼女の言葉を伝える。

彼女も相当な甘党好きだと言う事は、近しい間では有名だった。

「なんか美味しい甘いものでも奢ってくれそうだよ？」

結子の表情が、相応の女の子らしく微笑む。

二人は否応なしに散歩がてら歩いていた。

何時ものようにメトロでささつと出られるだろうと思っていたのが、大きな間違いの始まりであった。現実にはメトロは一部の線は終日運休が早々に発表され、他の線も運行を止めている。

その原因は言うまでもなく世界樹の現出である。

東池袋駅近くに突如現れ、急激に成長し巨大化したそれは周囲一帯を破壊し尽くしたと言って良い。凡そ半径1キロメートル圏内が被害に遭い、その中心数百メートルは文字通りに『消滅』の被害を受けている。それは地下空間も例外ではなく『根』によって有楽町線と副都心線は路線の一部区間が崩壊してしまった。丸ノ内線も線路が激しく変形する被害を受けている。

他のメトロ路線は直接的被害はなかったが、念のため運行休止。JRも山手線他が止まってる。

そのため首都圏の交通網は大混乱の様相を呈している。内閣は非常事態を宣言したものの、有効な対策が打てていると言うには程遠い。流石に都心のだ真ん中を食い破って大樹が生えてくる自体を想定しろと言うのも無理があるので多少は同情の余地がある。死者・行方不明者は休日だったこともありまだ少ないと言われているが万を越えるのは間違いない。負傷者はその数倍にも達するだろうが、治療する人手は圧倒的に足りていない。

被害総額は計算するのもアホらしい額だろうと言える。

ここまでの混乱は2021年の関東震災以来だろう。

そんなわけで二人はオフ会集合場所の有楽町駅まで歩く。

そこまでしてオフ会がしたいのかと問われれば答えは、どちらかと言えば『NO』であった。その割りに何故こうして出歩いているかと言えば、他にやることを思い付かなかったと言うことが大きい。二人とも何もなければ、休日は仮想世界にすることが多い。

そのTWがサービスを停止しているので、要するに暇なのである。

わ「すごい目立っている気が……まさか外人の気持ちがわかる日が来るなんてね」

悠早の今の容姿は否応なく日本では目立つ。

可愛らしい顔立ちに、不思議な輝きを放つ淡い青みがかった銀髪。サイズの合っていない大きめの濃紺のPコートの下からはチエック柄のプリーツスカートと言う出で立ち。そこから黒のオーバーニースに覆われた足が伸びる。コートに覆われて判りにくいけど、ほどよく細いすなりとしたモデル体型。結子との身長差がほぼ足の長さの差、と言う現実が彼女の気分を悪くしている。など目立たない要素の方が少ない。

中でも、やはり髪の色がもっとも人目を引く。

「その見た目で人目を引かない方が、それはそれでおかしいと思います」

「そうなんだけれど、あまり理解したくない」

「ちょっといい気味です」

結子はそう言って頬を膨らませ、ピッツと顔を背けてしまう。

どう見ても服の持ち主。コートだけは悠早の物だ。である結

子本人よりも、凡そ似合っただけになっているのが彼女としては面白くない。あらかじめ解っていたことだけれど悔しいものは悔しい。

着替え。主に下着的な意味で。を手解きした時に見た光景が

彼女の脳裏に浮かぶ。

仮想世界なら下着を含めた着替えなど、ワンクリックであった。

人によってはそれも含めて楽しんでいるようなプレーヤーも割りといったようだが、悠早にはそう言う趣味は特になかったらしい。現実ではそうはいかず四苦八苦した拳げ匂に結子に教えを乞いに行っ

物自体はインベントリに全てでは無いが、装備品は多少は残っていたので　ロストしている物も多々あって、いまいち残る基準が判らなかった　それを使用した。
ただインベントリの癖に1度取り出したものは2度と収納できない。

引き出すことはできても預けることはできない。

悠早はその半端な制約にこれを与えた何者かに小言の一つも言いたくなくなった。

武器とかどうするんだと頭を抱えたが、解決策は浮かばなかった。

どちらにせよ流石に非現実産だけあって、染み一つない血管が透けて見えるほどの肌の白さ、きめ細かさが強く印象に残っていた。
仮想世界でもあまり身体のラインが出ないような装備ばかりであったため甘く見ていたが、出るところは出て引つ込むところは引つ込んだ体型には『羨ましい』以外の感想が思い浮かばなかった。

思い出せば出すだけ、腹立たしさが喉元まで沸き上がってくる。

とりあえず、八つ当たりだと理解していても止まらない、やめられない。

結子の心情はそんなところだ。

「……………目が笑ってないから？」

「軽い冗談です、イツツアジョーク？」

「なぜ疑問系……………？」

「気、の、せ、い、です」

悠早は一応、妹様の不機嫌の原因は理解してはいた。

だからと言ってどうにかできるような話ではない。

彼から見ればそんな気にするようなことではないように思えるが、彼女にとってはそれなりに大きな問題であるらしい。

感覚の差は埋めようがない。

「はあ……」

「なに溜め息なんてついてるんですか？ せつかく”可愛い”女の子になれたんですから、楽しまないと損ですよ？」

「むしろ何を楽しむのか聞きたいんですが？」

結子は待つてましたとばかりに、ニタリと笑う。

すぐに、それを言わせるんですか？とでも言いたげに頬を赤らめる。

そのまま身を乗り出して上目遣いで見つめている。

(ないからさ………たぶん)

悠差は何も見なかった、聞かなかったことにして、目を逸らす。

「いわゆるTSな訳ですから、することなんて決まってるじゃないですか。むしろお約束は消化すべきだと思いますが、………いかがでしょう？」

「心の底から遠慮いたします」

強い口調で断言する。

妹様は頬を膨らませているが、敢えて気づかないふりだけでもしてささやかな抵抗を試みる。

「姉様はサービス精神が足りません！ 精進すべきですねっ……！」

「後ろ向きに善処します」

要約するならば『NO』である。

暫くは彼女の玩具にされそうだと悠早は溜め息を付くことしかできない。

それでも、それで気が少しでも晴れるのなら安いものなのかもしれない、などと損得勘定をしてみるが精神的なダメージを考えると微妙なことに気づく。でも、大赤字にならなければいいと希望的観測をしている。

どちらにせよ前向きに努力し、行動するのは彼の趣味ではない。

「そこはむしろ斜め上方向に飛んでください、是非」

それは無理だよと、悠早は心の中でツツコミを入れた。

銀座の街はまだ遠い。

01 (後書き)

補足

S o p : 悠早の武器「Staff of The Prophe
e t - E l a r i s A l m a c i n a (預言者アルマキナ
の杖)「の略

W I S : W h i s p e r、ささやき、要するに1対1チャット。

なんか妙な略語が出てきたらだいたい装備名かスキル名です。

駅前の個人経営の小さなカフェで物憂げな表情を浮かべている。

日本国内のごくありふれた光景の中にあつて、彼女の居る窓際の1席を中心とした区画だけは、異質な雰囲気には満ちている。まるでファンタジー世界を周囲1メートル四方だけ切り出してきて、きつちりと日常の1コマにはめ込んだような、そんな違和感、異物感。

物静かに何処かを見つめる彼女は余りにも美しかった。

人によつては天上の女神や天使の姿を思い浮かべるかも知れない。いかにも東欧系の美少女といった顔立ちに、瑠璃色の瞳。

ウエーブのかかった細く柔らかなロングヘア。

金色に近い色合いのプラチナブロンドを、黒いレースのリボンでポニーテールに纏めている。

そんな華やかな雰囲気と容姿とは裏腹に、その服装は非常に地味だといつて良い。

それこそ、『それなんて喪服ですか?』とでも問われかねない程の見事な全身黒づくめ。光沢のないゴシック・ドレスの　ゴスロリではない　の上から、ケープ付きのコートを羽織る。今日はそこまで冷え込んでいないと言つのに、これでもかと過剰なほどの防寒装備。

周囲の客が好奇の視線さえ意に介さないと云つた様子。

世間様の一角が大混乱の只中にあると言つのに、駅前の人通りは平常時のように多い。

そんな通りすぎては消えていく人の波を、意味もなくじつと観察している。

クリスマス直前の休みであるためか、やたらめつたらと初々しいものから円熟したものまで様々なカップルの姿が見受けられる。彼らの表情は一樣に幸福そうであり、中には世界中の幸せを独り占め

とでも言いたげな者も居る。なんだかんだで自分達には関係ない、そんな思考の人間は多いらしい。

もつとも、そんな若者の街の一つは壊滅的打撃を受け、絶賛封鎖中である。

そうでなくても彼女はとてもではないが浮かれた気分には程遠かった。

「ほい、つてか……なにを見てるよ？」

「……………うん？」

男が、彼女の前に湯気が立つカフェラテをトンと音を立てて置く。彼女は視線すら動かすことなく、窓に映った姿越しにその声の主を捉える。

その優しい声音に違わない、穏やかな表情の好青年の姿。まあ凡そイケメンの代表、それこそ芸能界に入っても恐らく十分にやっていけるだけの人も羨む美形。それでありながら厭味つたらしさや、鼻にかけているところもなく世の中が不公平という証左とも言える人物。スポーツのイメージで言うとテニス、楽器ならばピアノ、そんなイメージを持つ者が多い。

これで性格やら頭やらが悪ければまだ可愛げがあるのにと、彼女はよく思うのである。

しかし現実には神は2物も3物も与えたようで、トップではないが頭よし、運動もでき、人当たりも良い。性格には若干の難があるが、それでも悪いとか捻くれていたりとか言うわけではなく、むしろ好印象のほうが遥かに強い。

凡そ、非の打ち所が無いような真人間の見本のような人物。

彼は椅子を引くとゆったりと腰を下ろす。

「随分とポーツとしてるな、と、ね？」

「色々と考え事をしていただけです」
「そっか……」

彼女の答えは随分とそっけない。

そんな反応を見ながら、彼は思わず口元が緩む。

そして視線を瞳から頬へ、薄い唇へ。小さな耳から前髪、首筋へ、そして流れるようなポニーテールの先へと視線を移していく。白磁のマグカップの縁を滑るようにして弄ぶ、不健康なほどに白い肌と指の動き。

彼女はそんな舐めるような視線にも特に反応はない。

「まっ、しかし、現実で見ても思わず見惚れる美人さんだなあ……」
「……………」

その言葉に、これまでと打って変わって眉を顰める。

露骨に『不快』と言う表情を顔にしている。

「あのね、真介……こっ恥ずかしいからそっ言う物言いは止めて欲しいわけですが？」

「いやあ、自他共に認めるロリコンの俺でさえありだと認めるぞ」

「それは全く嬉しくない高評価ですね……」

彼女の外見は、年齢的には16から17程度に見られることが多い。

多少は幼い雰囲気を残した顔立ちのせいか、立ち居振る舞いや表情によっては更に数歳年下に見られる事もあった。どちらにしても『少女』というには年を喰い過ぎており、女性と言うにはまだ幼い。敢えて表現するのならば、それこそ『乙女』辺りが適切だろう。

とにかく少なくともロリコンという人種のターゲットになることはまずない。

こういつ時は怒るべきなのか、嘆くべきなのか、喜ぶべきなのか、難しい所であった。

世間一般の女性はこういつ時にどんな反応をするのだろうか、くだらない思考の海へ沈む。

「はあ……上手くないもんだ」

彼、高柳 真介は盛大に溜め息をつく。

「でも世界つてのは不公平だよなあ……俺も外見変えてほしかった」
「もつたいないお化けが出るのではないでしょうが？」

彼女は血管が数本切れかけるのを意識しながら言葉を搾り出す。

彼が今の外見を嫌っているわけではないが、別のものに憧れているのをよく知っていた。

胸の前で拳を握って語り始めると、『また始まった』とうんざりした表情に変わる。

あこがれの銃器がどうだ、男キャラとはこうあるべきだという論に始まり、美形重視の和RPG批判やら、メカニックがどうだと、話が脱線に脱線を重ねてあらぬ方向に、流されるままに流されていく。結局のところ、彼としてはハリウッドのゴツイ合衆国軍人のようなタイプのほうが好みだということである。

そして、実際に彼らもプレーするTWにおいて、彼はその理想を具現化するように現実の容姿とは似ても似つかない姿をしている。スキンヘッドに無精髭の生えた顔面と身長180半ば、浅黒く日焼けした肌に包まれた筋肉ムキムキの大男。機関銃やらRPGやらを担いで戦場を駆け回っていても不思議ではないような姿。ゲーム内で古代金属と呼ばれる高性能金属製の鎧を身に纏い、150センチを超える巨大な剣を片手でやすやすと振りまわす。

だからこそ、一見さんの日本人には外国人だと間違いないと思われ

る。

オタクの話はとにかく長い。

彼女は途中からカフェラテを愉しみながら、適当に相槌を打って流す。

「でも、俺としてはやっぱり優男よりもゴツいマッチョの方が好みなんだよなあ……浅黒い肌で、いかにもアメリカンなのが」
「はあ、もう今さら何も言いませんけどね？」

やっと終わったと、小さな溜め息が漏れる。

真介は語り終えたぜという満足感に満たされた笑みを浮かべながら、砂糖もミルクも一切入れないブラックのコーヒーで喉を満たす。彼は別に通ぶっているわけではなく、単に甘いモノが苦手なだけである。家ならば緑茶、外ならばブラックコーヒー、場所によっては紅茶、全てをストレートで飲むのが彼の流儀である。

その姿を野蛮人を見下すような表情で眺められているが、彼は全く意に介す様子はない。

なんでこいつは、と言う彼女の呟きも聞こえていないようである。

「で、優希」

「なんですか？」

「いや、別に口調まで変える必要はないかね？」

その真介の言葉に、彼女は随分と難しい表情に変わる。

彼女と言うより彼、藤宮 優希の中ではまだ全てに折り合いがついているわけではない。

彼もまた、今朝始まった変異に巻き込まれた口であり、仮想世界内の容姿に知らぬ間に変えられていたので一応は被害者である。

彼は彼なりに考え、朝起きてからああでもないこうでもないと思

る舞いを検討してみて、仮想世界のキャラ時と同じようにしていないと落ち着かないという結論に至っていた。さすがに丸6年以上も慣れ親しんでいるので、急に変えようとするのは抵抗があった。自分自身で作り上げてきた物を叩き壊してしまうような恐怖感があったといっても良い。

だから可能な限り、それらしく振る舞っていようと決めていた。彼にとっては割りとどうでも良いことだった。

「気分的なものと言うより、癖ですね」

「いいけどな、呼び方はやっぱり『メイ』の方がいいのか？」

「どちらでもいいですよ……そんな細かなこと」

真介は腕を組み、真剣な顔で考えこんでしまう。

そこまで呼び方は深刻になるような問題なのだろうかと、小一時間問い詰めたい気持ち喉元まで沸き上がってきたのを無理やり飲み込む。そのまま、実際に呼ばれ方を脳内でシミュレーションしてみるが、どれも微妙すぎた。この仮想世界の容姿で居るときにリアルネームで呼ばれるのも妙な気分が抜けないが、現実だというのに仮想世界の名で呼ばれるのもシックリと来ない。

どちらがよいかと言われると、まだ仮想世界の名のほうが考える。

そこまで考えて、それはどうなんだと否定する。

「そっか、それならメイにしておく」

「そっ」

「気分的なものだけどさ、その方がしっくり来るわ」

「そっ言うんですか？」

「そっいつものね」

「いいですけど……」

優希は喉に魚の骨がつつかえたような、そんなすつきりしない表情をしている。

視線が一箇所に定まらず、頭が左に右にと規則正しく左右に揺れる。そして時折、何度も何度も頷いたかと思うと、すぐに首を小さく左右に振ってそれを否定する。そんな行動を幾度と無く繰り返し、最後に溜め息を吐く。

結論が出ることはなかったらしい。

真介はそんな様子を微笑ましくも、苦笑いしながら眺める。

「で、メイ的にはどうなのよ？」

「それは、どういう意味の質問ですか？」

「いや、リアルに女になった気分とか？ 一応は大した意味がないんだけど、お約束っていうやつさ」

「あのですね。ここ1年はむしろこちらの身体でいた時間の方が長いんですから……どうも何もありませんよ？ あまりの違和感のなさにむしろ笑うしかないほどですからね」

「へえ……って、やっぱりそういうもんか」

仮想世界TWは現実世界とは時間の流れが大きく異なる。

多くのプレイヤーに様々な時間のプレーを楽しんでもらいたいと言う事らしいが、ゲーム内の24時間が現実世界の凡そ4時間半に等しい。現実時間の1日は仮想世界時間の5日半ほどに相当するため、人によつては体感時間的に仮想世界で過ごしている時間のほうが圧倒的に長いプレイヤーも決して少なくない。

それこそ土日にログインし続けていれば、ほぼ間違いない仮想世界の体感時間のほうが長い。

現実側から仮想世界へはデータを一切持ち込む事ができず、逆にデータを持ち出すこともできない。これが出来れば、仮想世界で勉強やら仕事をしたほうが捗ってしまうなど面倒が起きる可能性を排除するための措置である。それでも、仮想世界では教師や一部の異

常な記憶能力を有する者が、本などを丸暗記し塾や予備校的なことをしているプレイヤーも少数ながら存在している。

運営側も厳しく取り締まるつもりはない事もあり、そういった行為を目的にゲームを始める者も多い。

ただRMTだけは異常に厳しく取り締まられているのが救いだろ
う。

どちらにせよ優希などはかれこれ6年にも渡って慣れ親しんでいる『もう一つの身体』なのだ。

それもここ数年の連続的なアップデートで有り得ないほどにリア
リティーも増していた。

それこそ、肌や皮下の肉の質感から産毛の感触までである。

「でも、真介もそうだと思いますが……力が戻りきっていないから
か妙な違和感がありますよ？」

唯一の違和感は、身体に宿っている力が半端なことである。

今の身体のコンドイションでは仮想世界内ほど俊敏には動けず、
同じように振舞おうとしても意識に身体がついてこられないのは確
実であった。優希はそんな仮想世界の異常な運動能力が必要とされ
るような事態は考えたくもなかったが、全く『ない』とも言い切れ
なかった。しかし、今何かあったとしたら恐らく対応できない、そ
んな怖さを感じている。

それも少しづつであったても、確かにその違和感も埋まりつつある。
完全になるまであと1日、そのくらいだろうと予測している。

「なるほど」

真介も似たような感覚は少なからずあった。

今ならば、恐らく数多くの陸上競技で世界記録を片っ端から更新

して回れる気がしていた。

人間としては規格外もいいところの運動能力、昨日までと何も変わらない身体の何処にそんな力が宿りつつあるのかが不思議で仕方がない。それを言い出すと、目の前の『彼女』、その細く筋肉も殆ど無いような身体に秘められた力の大きさのほうがよく不思議である。

医者や研究者が泣いて喜びそうだと、そんなことを思う。

そして、何よりももう一つの不思議な感触がある。

「あと、俺だとさ」

真介はお腹の、ちょうど臍の辺りを我が子を撫でるように摩ってみせる。

そこに……、その丁度内側とでも表現するしかない場所に存在する異物の感覚。

実際に何か物質が埋まっているわけではなく、あくまでも感覚的なもの。

「腹のこの辺に、この辺りに武器があるのがわかるんだ。相棒の武器がさ」

真介の仮想世界TWでの相棒である一振りの片手直剣の姿が思い浮かぶ。

それは優希もまた同様であった。

「私もそうですね……真介と違って2本ですが」

「S o EとW o Yか……？」

片方は神器そのもの、もう一方も準神器と呼んで良い高性能武器。彼女を彼女たらしめていた、昨日まではワールド内で1本しか確

認されていないかった武器。地味な見た目ながら圧倒的な存在感を放つ、性能的に神器というに相応しいその『杖』の姿を真介ははつきりと思い浮かべることができる。

それがあるのならば、不思議と安心することができる。

敵に回られると厄介極まりない性能であるが、見方とできるのなら頼もしいものはない。

相当にドベタな支援プレーヤーであってもそれがあれば凡そどうにかなってしまう。

「正解です」

彼女は柔らかく微笑んだ。

02 (後書き)

補足

SoE : おなじみの杖、Staff of Elnia。燃費
お察しで攻撃力UP

WoE : 神器級杖、The Wand of Yggdras
ill。治療能力大幅UP

Theが付けられている武器がいわゆる神器級装備。

特に頭にTheがつくものは希少、超レア。

別にサーバ内に1本しかないわけではないが、本数は少ない。

優希の服装。

イメージは銀河鉄道999のメートルでどうぞ。

「そっぴゃ、午後はどうするんだ？」

「少しオフ会に顔を出そうかと思っけています」

真介は『は？』と何を言っけているのか判らないと言っけて表情で呆然としてる。

折角の美青年が台無しになっけてしまっけてるが、それをツッコまないのは優希なりの優しさ　アジア的優しさという便利なモノである。

実際に優希が彼の立場に入れば似たような反応を返すだろっけて事は間違いないなかつた。

それでも、その場のノリと勢いというのは非常に恐ろしいもので、一瞬の躊躇いもなく『問題ない』と回答してしまっけていた。朝起きても何が起こつたのか良くわからないけれど、気づいたら性別そのものが変わっけていた異常事態と、朝方のナチュラルハイな妙なテンションの複合的な産物である。

そして、半時ほど経っけてから『何やっけてるんだろっけて』と自問自答してたのは別の話である。

ただ優希としては彼の知り合いの多く　首都圏、23区近郊居住者だけであるが　が、参加を決めてた以上は『参加しない』と言っけて選択肢は存在してないなかつた。

彼は後悔もしてないなければ、反省もしてない。

「ふう……」

たっけて数分間の沈黙の間に、追加オーダーしたダーズンリンの香りを堪能する。

そして、窓ガラスに映る『それなりに絵になっけてる』自身の姿

に満足する。

「おいおい、こんな時にそんな企画をしたおバカは誰だよ……とてもじゃないが正気とは思えねえ」

優希は当たり前だ、そんなのは決まっていると言わんばかりに肩をすくめる。

その『彼女』の姿を思い浮かべながらどう調理するかと、考えれば考えるだけ楽しみが広がる。

彼女は真介の天敵なのだから。

「お馬鹿って……サイ君がそう言っていたって伝えておきますね？」
「……………誰に？」

2杯目をゴールデンドロップまでゆっくりと注ぐ。
ダーズリンらしい、マスカットフレーバーの甘い香り広がり鼻孔をくすぐる。

「誰って、ティッシですけど？」

白磁のティーカップを弄びながら優希は淡々と答える。
真介の顔から血の気がツーンと引いていく。

「……………」
「真介？」

「……………」
「生きてますか？」

「や、め、て、く、れ」

真介は消えるような声で呟く。

「……………メイ、まだ死にたくないから止めてくれ!!」

ガタンと店内一杯に響くような音と共に立ち上がると無駄に大きな声で叫ぶ。

音の大きさもさることながら、『死』という単語に反応して周囲の客の注目が集まる。しかし、それも割とすぐに若いカップルの痴話喧嘩の類らしいと理解されたようで、生暖かい視線へと変わってしまう。傍から見れば中のよい美男美女のカップルに見えても不思議ではない。

次第に他の客たちは聞き耳を立てながら、自分達の世界へと戻っていく。

そんな中で、優希は真介の予想以上の反応に肩を震わせる。

「相変わらず、ティッシ苦手なんですね…………?」

「いや、むしろあれと普通に話をしてられる人間を尊敬する」

「怯えすぎだと思えます」

そう言いながらも、無理もないと同時に思う。

彼女の放つ威圧感や雰囲気、それを引き立てる容姿と必要以上に恐れられる要素は余りにも多い。ある意味では、仮想世界TWにおいてPKerや廃ギルド以上に恐れられていたと言っても過言ではなかった。しかし、同時に多くのプレーヤーの目標でもあり、優希にとっては仮想世界において1、2を争うほど付き合いの長い、オープンベータテスト以来の付き合いの人物であり、戦友であった。親しい集まりでは『比較的』穏やかな彼女も、外では難しい顔をしていることが多かったのも記憶している。

その辺りが彼女の印象をトツキ難くしているのだと優希は思う。実際に、一睨みされただけでプレーヤーが逃げ出すのも日常茶飯事であった。

そして参加者のリストの中のもう一つの名前を思い出す。

「そう言えばユーリも来るって言ってましたね……………」

「あの人もよくわからんな……………あれと馬が合う時点でさ」

真介の目は、理解出来ないものを見たようにあまりにも遠い。

「真介の基準はそこですか？」

優希はただ苦笑いすることしかできない。

悠早は1階にあるカフェの椅子に力なくへたり込む。

いかにも慰労困憊といった様子で、表情にも美しさにも影が射しているように見える。

項垂れ、何度も繰り返し溜め息を吐く。

(なんで、女の買い物ってこんなに長いんだ……………)

妹の買い物に付き合わされる度に、彼はそう心底思う。

某デパートと言うか百貨店？に入ってからこれ2時間半近くも、様々なフロアに引きずり回されて居たのである。純粹に彼の服と言っても安全をとって結子と共用できるもの に始まり、下着から、雑貨や小物から食器に調理器具、果ては化粧品までである。

彼は全力で抵抗して見せたにも関わらず、腕力もとい『Ster』値に負けて引きずられていた。満足な抵抗にもならず、何度も転げかけながらずるずると……………彼は早い段階で無意味だと悟って諦めていた。

ステータス的にはS t rで悠早が凡そ30で標準的な支援職よりは少し高め、結子は手数重視のA g i系だがS t r値は70前半である。ざっと2・5倍の差になるが、実際に発揮される力の差となると4倍近くにまで開く。

文字通りに子供と大人の差がある。

(まあ確かにしてないよりは可愛いけど、けど、けど……認めたら負けじゃないか?)

朝とは違って、薄化粧した自身の顔が映る。

元々がノーマイクだったのを良いことに T Wでも化粧はあったがしていなかった、普段ならばまず踏み込むことのない化粧品売り場へと連れ込まれた。様々な香りが混じった鼻を突く空気に当てられて、すぐに気分が軽く悪くなる。

そこまでなら割とよくある話であった。

そのままカウンターに座らされ、なされるままに意味不明な用語を聞き流しているうちに化粧を施されてしまっていた。元々が色白で、あまり健康的な印象ではなかったのが、唇に赤味を加えるだけで随分と健康的に見え、印象が変わっている。

彼から見れば何がどうなったか判らない。

結子は真剣に色々と質問していたが、それが耳に入っているわけもない。

それでも、確かに数割り増しくらいで可愛かったことを認めるのはやぶさかではないと言う微妙な心境。これを認めると何かが終わってしまいそうな気がしていた。

疲労感の大半は精神的なものに間違いない。

「ああ……疲れた」

そんなお疲れの様子のお悠早とは打って変わって、結子は鼻唄混じ

りの様子。

買ったものは流石に宅配にしてしまったので身軽だ。

「私は全然疲れてなんていませんよ、むしろ楽しかったです。でも、体力的には問題なさそうに見えますけれど、姉様？」

彼女は意地悪そうに言う。

「主にメンタル的な意味で……ね？」

「姉様は随分と繊細で柔らかな精神をお持ちなんですね、驚きました」

「いや、あのね………ゆい」

どうして妹にここまで良いようにされているのだろう。と悠早は頭を抱えたくなる。

そんな様子を眺めながら結子はクスリと笑って、肩をすくめる。

「冗談です」

これからオフ会でケーキを食べると言うのに、結子はシブーストを口へと運ぶ。

蜂蜜漬けのリンゴと、クリームの甘い香りが悠早を悩ませる。

彼も主に結子や、やたら甘いモノが好きなのが好きな仮想世界の友人たちの影響で、今ではすっかりスイーツというものに目がない。流石に一人が入っていくような度胸はなく、妹とよく食べに行くほどである。だからと言って、『甘い物は別腹』と言えるほど胃袋は大きくない。

今ならいけるかも知れないと思いながら、紅茶だけで必死に我慢する。

結子は知らない間に物欲しげな表情をしている悠早を見て口元が

ニヤつく。

「でも、サイズが同じで済むので助かりました」

「戻っても無駄にはならないしね」

「本当に……ああ、もう、ちょっとだけ恨めしかったりもします」
「聞こえない」

悠早は何度も首を横に振る。

それに合わせて長い銀の髪が揺れ、乱れる。

「あと1時間と少しありますね」

「このままゆつくりしたいんですが……」

結子は次に何を見に行こうか、どうしようかと思考を巡らす。

家の茶葉が残り少なくなってるから買いに行こう、新しいブランドを買ってみるのも良いか、何処のブランドにしようかと紅茶の在庫を思い出す。それ以外にもまだまだ、買っておきたいもの、見ておきたいものは山のようにあった。

彼女はここでへたっている訳にはいかない。

「だらしないですね……そんなんでどうするんですかっ!？」

「そんなんでいいよ………そんなんで」

「………はあ」

結子は仕方が無い思いながらも、醒めた視線で兄をじっと見つめる。

まるで丁度よい玩具を見つけた子供のような、そんな表情をしているように悠早には見える。

怯える草食動物のように身体が小さくなっていく。

「何で溜め息を……………っ!?!?」
「!?!?!?」

爆発音と思われる重低音が二人の耳に響く。
それも至近距離だと判るほどの大きさ。

明らかに交通事故による衝突音とは異なり、なにか巨大な物体…
…杭か何かを地面に打ち付けたようなそんな音であるように悠早は
感じた。それこそバンカーバスターでも打ち込むか、地下でトン単
位の火薬でも爆発させればこんな音がするのではないか、と彼は思
う。

しかし現実にはそんなことは起こりえるわけではない。
大規模なテロによる破壊活動の可能性が悠早の脳裏をよぎる。
日本はまだ比較的平和であるが、世界的にはテロ活動は2000
年以降は沈静化する様子もない。

むしろより大規模に、より過激になってきているとすら言われて
いる。

「なんの音ですか……………今のって?」
「何だろう? 交通事故か何かでもあったのかなあ……………」

しかし悠早が気になった事があった。

交通事故はありえないが、大規模な爆発というには爆風が吹き荒
れたようには見えない。

少なくとも窓の外は平穏そのものであった、そのように見えてい
た。

それから間を置かず悲鳴が聞こえてくる。
それは徐々に大きく、多数の叫びへと変わってくる。

「さあ、見に行きましょう!」

結子の言葉にだらしなくあんぐりと口を開けて固まる。

「すごい野次馬根性だね、ゆい？」

「事件は現場で起こっているんです！ 話の肴のためにも、私の知的好奇心を満たすためにも、精神の安寧のためにも是非行きましよう！」

「いやいや、じっとしていようよ？」

「姉様は私が夜にあれが気になって気になって眠れなくなってしまつても良いと言うんですか！？」

「意味判らないから」

悲鳴以外が収まつたかと思うと、突如としてまるで雷が落ちたような音が連続して響く。

途切れることなく12回、それは最初の1発も考えればテロというには余りにも大規模にすぎる。

それに混じって聞こえた獣の遠吠え。

「えつと、なんだろう……この嫌な感じ？」

「さあ姉様、俺この戦争が終わつたら結婚するんだ的なノリで行きましょう！」

「死亡フラグは勘弁して欲しいね？」

逃げなければ死亡フラグが立つと、そんな予感を悠早は覚えていた。

03 (後書き)

すごい前回の切り方が中途半端ですが気にしてはいけません。
あと、あちこち直します。

銀座3丁目交差点。

休日でもなくても人で溢れる街の中心。

ほんの20分、いや10分ほど前の日常はそこにはない。

あらゆる人の負の感情が満ちている空間。

存在しているのは非日常的な、非日本的な凡そ平和とはかけ離れた光景。

何処かの紛争地帯にでもいきなり迷い混んでしまったかのような、破壊と殺戮の傷跡が生々しい。砕けてひび割れたアスファルトの路面に、人であったと思われる肉片やガラス片、コンクリートの塊など雑多なモノが散乱している。肉片に限れば、ちぎれた胴体の破片や、下半身だけの物体、内蔵だと思われるなにか、そして目を見開いたまま転がる生首まで。

恐らく数十名と言う単位の遺体の一部。

常軌を逸した惨状に結子も野次馬根性を後悔する。

「……………あれって？」

しかし二人の視線はそこへは向いていない。

決して現実から目を逸らしているわけではなく、それ以上に衝撃的なモノがほんの数メートルほど先にある。

今も新たに人を食い千切り、飲み込もうとしている化け物。

陽光を浴びて黒に近い濃紺色に染まった毛皮に覆われた闇の色の獣。

全高は2階に届くほどで、3メートルにも達する巨躯。2つの頭部を持ち、それぞれが異なった意匠の角で飾られている。最大の武器はその大きさに似合わない俊敏性、そして前肢から時折覗く鉤爪。1撃でも当たれば命はなく、かすっただけでも大怪我を負うことは

間違いない。

二人はそれを知っている。

悠早の脳内にその情報が流れ込んでくる。

(ヘル・ハウンド……………ランク88以上、それもNMって、おい！?)

昨日までのVRMMORPGとしてのTWには、他のゲームで言うところの『レベル』は存在していなかった。

何故ならTWはほぼ純粋なスキル制であったからである。

ステータスすらもスキルの一部であり、ステータス系スキルと技能系スキルをどう配分するかが一つ重要なポイントだった。そして技能系スキルをどれだけ振り、どのような組み合わせで上げるかによって、キャラクターの特性が決まる。

それに加えて『資格 (Credential)』と呼ばれるものにより、職業毎の専門性が生じる、そんなシステムを採用していた。例えば『聖職者』系資格を取得すれば、聖属性に属するスキル群が出現し、『剣士』系であれば武器種別『剣』の専門スキルが出現し、
上げるのが可能になる。

スキル振りと装備、プレイヤースキルPSが強さを決定する。

レベルと言う絶対的な指標は存在し得ない。

しかし、それだとPTを組むにもあまりに不便である。

凡その強さの指標として代わりに存在していたのが『ランク』である。上げれば、より高難易度のクエストが受けられる、店売りアイテムが安くなるなどの特典がある。ただし上げてもキャラクターそのものにボーナスがつくようなことはない。

純粋に指標としての機能。

4年程度のプレイヤーの平均が80前後と言われている。

視界にいるヘル・ハウンドの88は難易度としてはかなり高い部

類に入る。平均的なプレイヤーのPTが挑むダンジョンであれば中ボス程度の強さに当たる。ソロで余裕を持って挑むなら、ランクで15の上積みが必要と言う経験則を当てはめると100を越えていないと厳しい。

悠早はランク的には中の上だが、純支援職であるので戦闘力は皆無。

結子は魔剣と言われる高性能武器を持ってすら平均を下回る。

他に人を数人加えて、PTでゲーム内で挑まなければ倒すのは困難であると断言できる。

現状としては、挑めば大怪我は免れず、死の危険性も相当に高い。さらに悪いことに『NM』 正しくは『Named Monster』と言い、言わば無数に湧く雑魚ではなく、固有名を持ったモンスターである。と略される言わばボスであり、同ランクの個体よりも数段強力である。

「ねえ……兄さん？」

「……………うん、思ってる通りだと思う」

そう、二人で挑んでもまず勝ち目はない。

その時、化け物の上空に円を基調とした直径10メートルにも達する、巨大な魔方陣が出現し始める。TWであればモブの扱う魔法としては上位、プレイヤーが扱える類のモノではない大魔法。魔法攻撃の規模と詠唱時間は慣れれば、魔方陣の大きさと相手のランクと格から凡そは予想することができる。

それらを適切に予測し、判断して適切な指示を与えるのも支援職の役割の一つであった。

右の首が首を持ち上げ、その構成に集中している様子が見える。

「マズイ……………」

ヘル・ハウンドの扱える範囲内で最大級の範囲攻撃の到来。

注ぎ込まれる大量の魔力と、完成へと向かう魔方陣が放つ圧力を前に悠早は身を動かすことができない。何かしなければいけない、何をすべきかは判っているが動けない。

ボス戦に慣れたプレイヤーであれば、過剰ダメージによるデイス
ペル 詠唱破壊 を試みるか、速やかに安全圏へと退避する、
対魔法防御系バフの使用などの行動をとる。

結局のところ彼は危険性の高いボス戦の経験は少ない。

比較的安全圏での行動が中心であり、ボス戦も最後方からの支援
補助に徹していた。

理論・理屈の上では理解していても経験が決定的に足りていない。

「兄さん……!？」

「……………5、4、3」

心臓の鼓動が激しい運動の後のように高くなる。

嫌な、冷たい汗が全身から吹き出す。

「2、1……………来る」

「……………」

獣が吠える。

悠早はとつさに結子を引き寄せ、抱きしめる。

それを合図として、悠早がカウントダウンを終えるとほぼ同時に
攻撃魔法が発動する。

魔方陣が一際眩しい蒼い輝きを放つが、すぐに黒い霧に包まれる。
そこから放たれる数十本ののぼる光を通さない純粹な黒、漆黒の
雷撃。

いまだに輝きを放つ魔方陣を中心に、広がった傘の骨のように四
方八方へと破壊を振り撒く。それは大蛇のように蛇行しながら回転

し、コンクリートの建物を切り裂き、アスファルトの道路に深い亀裂を残す。外壁どころか柱までも粉碎され、文明の象徴である近代建築がいとも簡単に、轟音を立てながら崩れていく。砕けた大量の窓ガラスの破片が降り注ぐ。

拳銃で応戦していた警官がその直撃を受け燃え上がる様子を捉えた。

身体の先端から崩れ落ちるようにして燃え尽きていく。

二人に見せつけるような過剰な破壊行為。

ヘル・ハウンドはTWにおいては『知性の獣』に分類される。

それも犬・狼型ではまず目にするこのないランク100を優に超える深淵の狼『Fenrir』、地獄の番犬『Kerberos』を代表とする幾つかを除けば、高い知性と物理・魔法攻撃を兼ね備えた強力な化け物。その絶大な破壊力がもたらす結果に言葉が出ない。

悠早は左の首が確かに二人を見ていると認識する。

深紅の瞳がいつその輝きを強める。

「いや、さ……さすがに」

笑っている、彼はそう感じる。

(逃げられない……むしろ)

逃げれば広範囲に被害が拡大する、あれは追ってくると言い切れた。

そして結子では到底あれの相手をするには難しい以上、彼が引き受けるしかない。自己犠牲などと言う崇高なモノではないが、実の妹を目の前で殺されるのは見たいとは思わなかった。

これで兄妹仲が悪ければ、また違ったかもしれない。

「ゆい、逃げろ……。3分、そのくらいの時間は稼ぐ」

「兄さん、なに血迷ってるんですかっ!? 死にたいんですか!?!」

結子は左腕を掴み、珍しく激しい口調で捲し立てる。

戦闘型でない時点で勝ち目はない。

それでも、特に防御支援を核としたスキル、テクニク構成を取っているため、死なない戦いはそれなりに可能に思えた。ただし、どれ程持ちこたえられるかは未知数であったが。

それでもカツプ麵が出来上がる程度、妹一人逃がす時間を確保するは可能だと踏んだ。

その後どうするのかは考えていない。

「キリエを張り続ければそのくらいはたぶん持つ……はず」

「アホですか、バカですか、さっさと逃げますよ?」

「逃げられなさそうだし……ねえ?」

それまで一步たりとも動かなかった獣が右足を踏み出す。

悠早は大きく息を吸い吐き出す。

唱えるべき言葉は『システム』が示している。

「System command, summon weapon.
Staff of the Prophet, Elaris
Almacina………」

悠早は獣の瞳を見据える。

体の正面前方数十センチの地点に魔法の青い光を散らしながら1本の杖が出現する。

ゲームのものとは思えないような、シンプルなデザイン。

TWにおける武器のデザインはFからAまで順にランクが上がる

ごとに華美な装飾が施され、金ピカで宝石を多数あしらったゴテゴテとしたモノへと変わっていく傾向がある。しかし、不思議とSランク以上……所謂神器、準神器クラスとなると逆にいきなりシンプルで、単純なデザインになることが多い。支援職用の杖の最高峰として知られるWoyこと『The Wand of Yggdrasil』などは、真紅の宝玉を埋め込んだだけの樹の枝にすぎない。

彼の武器であるSOPもそんな準神器の末席に位置する武器らしく例に漏れない。

古代金属製の棒の先端に、アメジストのような色合いの宝玉。飾りと言えば、宝玉を支える三首の蛇くらいのもの。

「冗談ですよ……ね？」

「割と本気」

それなりの、この場においては何の力もない人々に比べれば十分な力があっても、足を引つ張る事にしかない事が確かな現実に唇を噛む。幸か不幸か、彼我の実力差がわからないほど彼女は愚かでもなければ、無謀でもない。どちらかと言えば、TWにおいても前に立ちながらも周囲に守られていたという事は理解していた。半端な力、それが腹立たしくて仕方がない。

結子は力なく、兄を引き止めるために掴んでいた手を離す。

「ごめん……ダメだったら爺ちゃんと婆ちゃんにはよろしく」

悠早はそれだけを搾り出すと、走りだすと同時に詠唱を開始する。

悠早はモンスターの相変わらずのデタラメさに、遣る瀬無い気分

が湧いてくる。

数十と言うプレイヤーでは有り得ないと断言できる数、いくら小型と言ってもこれだけの数の魔方陣が一度に展開されていく様子は圧巻であった。プレイヤーであれば仮想世界の魔法職の頂点に君臨する『魔女』であつても同時展開は精々10個程度と言つたところに過ぎない。

それも余裕綽々といった表情に感じられるのが憎らしかった。

この程度は前座もしくは小手調べ、居酒屋ならばお通しと言う程度にすぎない。

先ほどの大魔法に比べれば、数は多いものの大したことはないように見える。

魔方陣の単純さから、魔法弾系の攻撃だろうと彼は予測して動く。当たらなければどうと言うことはない。

そんな考えの元に、獣の注意を敢えて引き付けるために遮蔽物のない道路を駆け抜ける。

もし攻撃が当たった時にどうなるのかはやってみなければわからない。たった一撃だけで致命傷となるかも知れず、逆に魔法防御のお陰でかすり傷程度にしかならないかも知れない。下手をすれば前に見た警官のように苦しみ悶えながら燃え尽きていくのかも知れない。

要するにやってみなければわからない博打である。

それでも即死はありえない、悠早はそれだけは断言ができた。

もっと言うならば、そのバフさえ維持し続けることが出来れば勝てはしなくとも負けることもないと言えた。

短時間でも膠着状態に持ち込めればそれでいい、それが彼の考えである。

その間に他の誰かが打開策を考えてくれることに期待するしかない。

「……………acljem illus nir・Kyrie EI
eison!」

有効限度ありの絶対防御テクニクが完成する。

ゲーム内における仕様では耐久度、耐久回数のだちらかが無くな
らない限りは、攻撃から自動でバリアが展開され続けると言う非常
に使い勝手の良い防御支援テクニクである。特に高い回避能力が
あればその効果は絶大で、殆どノーダメージで狩りを続けることす
らできる。

使用上の難点はクールタイム 再使用ディレイ が5分と比
較的長い事が挙げられる。

それでも防御支援の中では最高峰と評される優秀さである。

1番の難点は実のところ『取得がめんどくさい』という点に尽き
る。

(避けきれるかね……………あの数を)

悠早は追加で無詠唱可能な極めて基本的かつ、小型の支援魔法を
準備していく。

幾つかの魔方陣の輝きが強まるのを合図に攻撃が始まる。

04 (後書き)

補足

K y r i e E l e i s o n (キリエ・エレイソン)

通称はキリエ。B i s h o p、H i g h P r i e s t 用支援テクニ
ック。

武器ランク

S + (神器)、S (準神器)、S - (伝説級)、A - F。

Aランク以上の武器は例外なく『古代金属』と呼ばれる物が素材。

身体の横数センチの空中を純粹な闇色の攻撃が通過する。全面から接近する追加の2弾攻撃の軌道を予測しながら、悠早は綱渡りを続けていた。

(左……右、びみよい)

数本の触手の襲撃を最小限の回避行動で躲していく。外れた攻撃はすでに原型を留めないほどに碎かれ、破壊の跡が生々しいアスファルトを更に鈍い衝撃音と共に抉る。それなりに強度はあるはずであるが、薄皮を捲るように、余りにも容易に地面には傷跡が増えていく。

それに加えて時折混ざる闇属性の魔法弾。

一帯に漂う錆びた鉄の匂いが、悠早の集中力を乱す。

彼は血の匂いも、その見た目も好きではなかった。血液検査などは大の苦手で、注射器の中に満ちていく血液を見ただけで気分が悪くなるほど。そんな彼にとって、この空間は拷問場のような物であったが、文句を言っても仕方がなかった。

ただ脳が現実を拒否しようとしているのか、世界から色が失われている。

一面のセピア色の世界が彼の視界に広がっている。

それが精神をまともな状態に辛うじて保っている有様。

ただ機械的に思考する。

身体を動かす。

自身の肉体とは思えないほどに思考と行動が繋がりに、一致している。

それを知るわけもなく攻撃は無慈悲に間断なく続く。

数本つつ時間差をつけての攻撃ポイントは的確で、行動パターンを把握されてしまっている。

慣れたプレーヤーであればフェイントやらを織りませて対処するのだろうが、悠早はそう言った方法論を知らない。

(間に合わない……)

なんとか直撃だけは免れているが、それでも時折攻撃が身体をかすめて行く。

その度に自動防御が発動し、耳障りな甲高い音と共に淡い緑色の障壁がダメージを防ぐ。

(あれは……迎撃する、しかないか?)

悠早は右足を半歩分引く。

右手の杖を中段に構え、前方から飛来する1発の魔法弾へと照準を定める。

最低限の対モブでの戦闘訓練だけは習い、実践していたのが幸いだったと悠早は心底思う。

これがここ数年の『ゆとり』プレーヤーであれば、支援は支援らしく、魔法使いは魔法使いらしく後方でじっとしているのが基本である。支援や魔法職が前へ出て戦闘をするようなこともなければ、身を守る術があるかも微妙な所で、不意打ちに対して最低限の有効な防御も出来るか怪しい。そんな脆弱な後衛職を守るために、中衛的なポジションの身の軽い遊撃職をPTに加えるのがセオリーとなっている。

それに比べると悠早は、周囲に『戦闘ができる支援』ばかりであった。

見よう見まねであるが、ある程度は基本的な戦闘スキルが身に付いている。

型に従って、右足から踏み込み杖を前方へと突きだす。

基本的な単発の突き攻撃である『Single Spike』を發動させる。

極初歩の攻撃に過ぎず、威力的には望むべくもないが使用後デイレイ 次のテクニックを發動させられるまでのデイレイ が短く、硬直時間 行動不能時間 はほぼ存在しないため比較的扱いやすい。大技になればなるほど、使用後デイレイ、硬直時間、クールタイムは伸びていくため、使い所は限られていく。

青白い光を放ちながら杖の先端が魔法弾へと吸い込まれていく。魔法弾は音もなく破裂し、煙のような靄となって霧散する。

(迎撃成功、更に2……弾幕シューティングでもやってる気分だな)

他の多くのVRMMORPGと異なりTWでは『魔法迎撃』が可能であるがゆえに出来る芸当。

それはシステムの定義されているものでない。バグか仕様かは不明と言う比較的広く知られた、メジャーなシステム外スキルである。

過去に運営会社に問い合わせを行ったところ、『問題ない』と言う返答があつたので建前上は『仕様』と言うことになっている。実際には『修正不能のバグ』だろう、と言うのがプレイヤーの共通認識である。

ある程度以上を持つ攻撃、もしくは対属性攻撃を叩き込む事で実現する。迎撃に求められる威力は迎撃対象の魔法の威力で決まると言われているが、実際のところ明確な基準は存在していない。要するに勘と経験が物を言う。

そのお陰で範囲魔法以外は『必中』の魔法攻撃は存在しない。

(ああきりがない……)

左足をバネに、後方へと数メートル跳躍。

半秒ほど前まで彼の居た地点を数本の触手が抉っていく。

2分。

3分……4分。

ただ無意味に時間だけが過ぎていく。

攻防は一進一退を続けている。

悠早は道路が穴だらけになるまでは1箇所を踏みとどまり、安定した動作が困難な状況になると数メートル単位で移動する。化物も本気ではないのか、それとも戯れてでも居るのか悠早を殺しに来てはいないような感触を受ける。

攻撃が彼のスキルで十分に対応可能な範囲に収まっているのが不気味だった。

そんな事を思考しながら、それをひたすら繰り返す。

その度に穴だらけになって行く道路を何の感慨もなく横目に眺める。

相手の懐へ飛び込んでしまえば多少は楽になるのだろうが、20本近い触手の群れがそれを許さない。

距離にして10メートル弱。

一瞬で接近できるはずの距離が余りにも遠い。

「ユーリ、下がって！」

永遠に続くように思われた奇妙な均衡は、その声を契機に突如として崩れる。

逆光を背にして、悪魔のような天使が舞い降りたように見えた。

断続的に響く道路に穴を穿つ破壊音

「ユーリが頑張ってるのもありますけど……ヘルハウンドも本気ではないようですな」

優希は辛うじて崩落を免れたデパートの5Fの窓越しに、巨大な漆黒の獣の姿を見下ろす。

そして獣から前方へ10メートルほどの距離を保って、青みがかった銀髪が振り乱す彼女の姿。

彼は窓枠に足をかけ、右手に杖を握りしめ、じつと攻撃の機会を伺う。

すぐに出ていっても問題はないが、最初の1撃で可能なかぎり大きなダメージを与えておきたかった。優希も本質は『支援職』の『Bishop』であって、接近戦闘は本職ではない。倒しきる自信はあったが、正面から殺り合うと少々時間がかかりすぎると踏んでいた。幸いなことに、システム外スキルである『ステルス』を使用していること、そこに彼我のランク的差が加わっているお陰で、彼はまだ獣にその存在を察知されていない。

奇襲をするにはもってこいである。

ただ、今敵の攻撃を一手に引きつけている友人のユーリの負担を考えるとあまり時間もない。

ある程度の自衛能力はあっても、戦闘能力は遥かに劣ることをよく知っている。

優希は右手に固く握られた白銀色の武器へ視線を移す。

彼の杖、S O E Staff of Elnia は一見するとその穂先から槍のような印象。

しかし近くで見れば、いささか武器らしくない2対の飾り羽と、瑠璃色の宝玉、そして刃のない穂先の流れるような優美な姿。槍のように見えて槍ではなく、杖のように見えて杖ではない。

その印象を受けるのは半分は正しい。

しかし、M i g h t y S t a f f に分類されるそれは、その外見に比して巨大な攻撃力を秘めている。

一般的に杖は魔法増幅のために装備するが、S o E は例外的に純粹な近接戦闘用の武器だからである。

(攻撃の合間……ユーリには悪いけど、もう少し頑張ってもらわないと……)

全ての触手が本体から離れる瞬間を待っていた。

高威力の攻撃テクニクは消費MPは勿論、様々なディスプレイが大きく使用に制約がある。

打ち込んだは良いが、その後の反撃で大ダメージを食らっては堪らない。

「今だ……」

一瞬の隙を見逃さない。

トンと窓枠を蹴り、空中へと躊躇うことなく身を投げ出す。

「ユーリ、下がって!!」

眼下で戦闘を続ける彼女に呼びかけながら、極小さな魔法を無詠唱で発動させる。

風属性のオリジナル魔法、名前は特につけていないが周囲は『W A』とか『W i n d A s s i s t』等と呼んでいるようであった。

風を制御し、落下位置や速度に始まり、戦闘時の急加速、急減速か

ら果ては空中機動までを実施することが可能なお手軽でありながら便利な品物。それでありながら極初歩的なコードしか使用していないので、魔法制御や風属性スキルが低くても使用できる。

『複雑で巨大な大魔法よりも、初歩の呪文の応用のほうが余程使い勝手が良い』

それは優希のTWでの友人であり、最強の魔法使いと呼ばれる彼女の言葉である。

多くのプレイヤーは見た目が派手で、一見すると 実際にはダメージ量は大きい 破壊力の大きな大魔法を好む。実際にはMP効率と言う意味では、広範囲攻撃となると決して良くはなく無駄が多い。MP効率の良い単発系高威力魔法を使用し、多数を相手にするには呪文のMC Multicasting、多重詠唱 を持つて当たる。

プレイヤースキルさえあれば、その方が圧倒的に優位と言うのはプレイヤーの共通見解である。

そして、このWAは彼女の数少ないお墨付きを得られた物であった。

体感時間が数百倍にまで加速されていく。

細かな制御で落下地点を獣の右の頭部へと向ける。

ほんの数秒という短時間。

ヘル・ハウンドも突然の乱入者の存在に有効な対策が取れずに居る。

そもそも数秒で十分な対策が取れるわけもない。

「そーれっ!!!」

獣の1メートル以上もある巨大な頭部が眼前に広がる。

真紅の瞳が見開かれ、驚愕か恐怖かはわからないが、そういった表情が怯えているように見えた。

振り上げた杖に最大量のMPを込めると、一気に眉間へと振り下ろす。

テクニク名はPile Driver。

杭打ちの名の通り、槍もしくは杖を使用し下方へ向けて打ち込むための技である。

TW内ではそもそも槍や杖のようなりーチが重要な武器でこれを使わなければならぬような状態は、相手に懐に入られている状態であり、言わば『すでに終わっている』状態である。だからこそ使いどころがよくわからない攻撃テクニクと言われていた。

しかし、WAを使用した空中機動が可能であればそれなりに使い道はある。

鈍い衝撃が優希の腕に伝わる。

咄嗟に組まれた薄い魔法障壁に阻まれて、わずかにその威力が減衰される。

しかし十分な威力を秘めた一撃が眉間へと深々と突き刺さる。

(よし……次)

優希はさらに穂先を引き抜くと、頭部を蹴り地面への落下体勢に入る。

攻撃の手を緩めず、Pile Driverをコンボの起点として、次の攻撃へと繋げていく。

WAで落下速度を大幅に抑えこみ、横薙ぎ単発技『Circular』へ、そして『Single Spike』と頭部へ容赦無く連続の攻撃を浴びせる。特に2段目のCircularはヘル・ハウンドの右目にクリティカル・ヒットする。

柔らかな眼球を深く抉る、生々しい感触が不愉快で仕方がない。
獣が吠える。

優希は更に数発の単発攻撃のコンボを繋げ、地面へと軽やかにと表現するには程遠い…… S O Eを地面に突き立て急制動を掛ける形で、強引に着地する。その衝撃は流石に大きな負担であったが、耐えられないほどのものではない。

ある程度はW Aによって緩和されていた。

「ふう……………」

20本近くも蠢いていた触手が半減しているのが見える。

ヘル・ハウンドは魔法を司る右の首のそれなりに深刻なダメージによって、これまでのレベルで魔方阵を維持することができなくなっている。これもT Wであれば一時的なステータス・攻撃力の減少に留まり、ある程度時間が経過すれば元の水準まで回復するところである。その辺りは現実的でありながらも、同時にゲームらしさが必要であった故の措置だろう。

しかし深く抉られ、完全にその機能を喪失した瞳が回復する兆候は見えない。

ヒールを含めた治癒呪文で回復させられるのかは、優希の興味のある所であった。

「メーさん、大丈夫!？」

優希はただ1度だけ小さいながらも力強く頷き返す。

先程まですべての攻撃を一手に引き受けていた彼女も随分と余裕が生まれている。

触手の数は一気に10を切る水準まで減少し、魔法弾による攻撃は完全に停止している。触手による攻撃も鈍っており、それまで彼女を追い詰めていた切れ味はない。

(さてどうしようか……うん、勝てないことはないけどだるいかも)

片割れに深手を負わされ、左の首の表情に怒気が満ちているのが見える。

遊びは終わりだ、そう瞳が訴えているように感じていた。

優希は、溜め息混じりに再び杖を構える。

余りにも非常識な数の死傷者に人手は全く足りていない。

彼女らと同じプレイヤーだったと思われる数人が治癒魔法で治療に当たっているが、焼け石に水の状態と言って良い。

このままでは満足な治療を受けることも叶わずに死んでいく人々も多いのではないかと思えるような状況。実際に四肢の一部を失っている、明らかに速やかに手術が必要な深手を負っている重症者も多い。それに加えて、事件が人の集まる交差点、それも街の中心で発生したために怪我人はこの一帯だけではない。

我先に治療を受けようとすると、受けさせようとすると人々の罵声や悲鳴は途切れることがない。

そこは完全に戦場であつた。

「兄さん……」

そんな中で結子はじつと終わらない戦闘を見守っていた。

周囲では慌ただしく様々な人々が動き回っているが、彼女の目にはそれは映っていない。

幸いにも加勢があつたことで、危機的な状況は脱したといつてもそれ以上に自体が好転する様子はない。断続的に輝くエフェクトから確実に攻撃が行われ、ダメージを与えていることはわかってもらえが終わる予兆はない。

少なくとも獣の動きはまだ鋭いままであると言えた。

「あれ、……………この人？」

ふと目に留まったその姿に、彼女は見覚えがあつた。

170を越えるスラリとした長身。

刑事物によく出てくるようなトレンチコートが全身を覆っている。何よりも お世辞にも目付きの良いとは言えない 猛禽類を思い起こさせるようなキツイ釣り目。右の瞳が翡翠色、左がダークブラウンのオッドアイ。いかにも白人系の美男美女の姿を取るプレイヤーが多い中であって珍しい日本人風の顔立ち。そしてそれに合わせるように腰の下まで伸びた癖のないストレートの黒髪が白い肌に映えている。

加虐心の塊のような、気の強そうな美人の姿。

そして同時に和服でも纏えば、極道の人か何かだと思われても不思議ではないほどの威圧感を感じさせる。

実際に周囲の人々もチラ見はしても、堂々と鑑賞するような人間は見当たらない。

あの感覚は間違いない、と結子は確信する。

仮想世界、VRMMORPGの代表作『TW』においてランク的には日本最高位。

そして世界でもトップ3の一角を占めたプレイヤー。

その割には、彼女自身はゲームにすべてを捧げるような廃人ではなく、社会人として生活の傍らでプレーしているだけであった。それもプレー時間による差がつきにくいスキル制であること、そしてVRゲームらしくプレイヤースキルが随分ともの言う世界だからこそ可能な芸当。

良くも悪くも色々な意味、多方面で有名な彼女のその名を知らないプレイヤーは少ない。

「レティーさん？」

「……ん？」

彼女は『あんた誰？』と言いたげな怪訝な表情を向けてくる。

結子は自身の容姿が仮想世界のそれではなかった事を思い出し、

次に彼女が基本的に初対面の相手に対しては冷たい、そんな人物であつたことも大昔の記憶からついでに思い出す。

キツイ容姿と一匹狼っぷりから気難しいと思われる、そんな人物であつた。

彼女の仮想世界での名はレティーシャと言う。

「ああ……えっと、ユイの中の人です。はじめまして」「ゆいち?」

レティーシャは結子を上から下へと、あまり興味なさげに見渡す。その微妙な視線、絡みつくような感じはなく、舐めるような厭らしい物でもない……それに何とも言えない居心地の悪さを感じていた。

「はい、って何をしてるんです?」

「うん、観戦……と言っても、今来たところなんだけど」

レティーシャは視線を黒い獣へ向ける。

「ところで、あそこでワンコと戯れてるのはユーリだよな? もう一人がめーの字だつてのはすぐわかるんだけど。ああ、でも流石にめーの字でもあれはめんどくさそうだなあ」

「そうです……」

「さすがにこれ以上破壊活動続けられても嫌だし、ワンコをひっぱたいて来ますかね」

レティーシャは緊張感のない呑気な口調で言う。

何よりもあの凶悪な化物を『ワンコ』呼ばわりし、尚且つ、あれをソロでも容易に撃破できてしまうほどの単純に『すごい人』であるという仮想世界での事実。それでいて普段接している分には大手

ギルド等の連中よりも、何処にでもいそうな、割りと今時の何処かヤル気のない普通の人に見えて仕方がなかった。

その性格的な面の軽さと、見た目、実力のギャップに結子も最初は戸惑った物であった。

同時に彼女の目は笑っていないことにも気づく。

「あれをワンコ扱いなんですね……相変わらず」
「犬コロでもいいけどな？」

レティーシャの機嫌はすこぶる悪かった。

彼女の好きな『街』を随分と派手に荒らされ、このままだと折角企画したオフ会がダメになりそうな事に対してである。何せ、彼女が呼んだ二人である悠早と『めーの字』ことメイリアこと優希の両名が絶賛戦闘中であり、終わったとしても警察が何かに同行を『お願い』されることはほぼ間違い無いと言えた。

そんな彼女の口から、乾いた笑いが漏れる。

「……………そんなのは、どっちでもいいです」

結子はさっさとあの化け物を始末して、戦闘行動を終わらせて欲しかった。

加勢が加わって安全性が大幅に上がったと言っても、何が起ころてもおかしくはない。

そんな不満を込めた視線をレティーシャへぶつける。

「身体慣らしでもしますか。まあ、30秒もあればいけるかね……………」

彼女は頭を掻いてごまかしながら言う。

「……………はあ」

「System command, summon weapon.

」

彼女は淡々と流暢な英語でコマンドを唱える。

一呼吸おいてその武器の名を呼ぶ。

「The Grand Cross - Nemeseia!!」

グランドクロス。

それは巨大な十字架を持つ、審判の効果をもつ鈍器の一群の総称である。

その中でも特に彼女のそれは神罰の執行者ネメシスの名を冠した神器、神罰の代行者である者の証明と解説される。仮想世界での入手方法はMAMB M 大アルカナになぞらえた21種のMBMの一つが稀にドロップする事が知られている。そしてそれ以上にレティーシャの名と共に広く知られた、特に著名な武器の一つ。

全長は2メートル近く、十字架部分だけでも80センチを超えるほどの巨大さ。

彼女はそれを悠々と素振りしてみせる。

「まだちよいと重いか……………」

レティーシャはまだ力が完全に足りていないことが不満であった。

僅かな反応の遅れ、そして鈍器に身体が振り回されるような感覚が不愉快なのである。

それでもあの程度の化け物の相手なら問題ないと言い切ることができた。

結子は苦々しい表情で『早く行ってください』と訴える。
レティーシャはそんな強い視線に肩をすくめ、結子の頭にポンと手を載せて言う。

「よし、真打は最後に登場するってやつさ」

ヘル・ハウンドの瞳ははつきりと彼女の姿を捉えていた。

悠早は急にヘル・ハウンドの攻撃の手が緩むんだことを知覚する。獣の真紅の瞳も、既に彼と優希の二人を見ていない。その鋭い視線は随分と離れた人ゴミの一点へと向けられている。獣は攻勢から守勢へと転じ、必要以上に攻勢を誘わないように触手を引き戻していく。しかも、同時により小型で制御しやすい、もしくはきめ細やかな制御の必要がない。つまり数を揃えられる質より量優先である。攻撃魔法を次々と組み上げていくのが見える。隙を見せないその姿と振る舞いは、さすがに高知能の魔物と言ったところである。

「……………ん？　なんだ？」

2本の触手による牽制も役目は終わったとばかりに引いていく。悠早は突然の変化に何が起こったのか、状況を飲み込めずに居る。しかし、キリエの耐久度的に限界が近かった事もあって、それに合わせて数メートル後退する。優希もまた同様に深追いはしない。獣もそれに合わせるように、ゆっくりと後退していく。

(あとはティッシに任せますか……………ね、相変わらず美味しいところを持っていく)

優希はこの数十秒前から彼女の気配に気づいていた。

もっと正確に言えば、彼女の持つ武器……人間の創りえる物ではない神器に分類されるそれが放つ気配にである。

仮想世界においては第6感的なシステム外スキルも幾つか存在していた。

その一つが世界に満遍なく満ちていると設定されていた力の源である『魔力』もしくは『マナ』の波長の変化を読み取ることで様々な情報を得ると言うものであった。これは特に捻りもなく『マナ・サーチ』やら『魔力探査』等と呼ばれていた。得られる情報は周囲一帯のモンスターやプレイヤーの位置情報に始まり、凡その強さや状態、装備の概要等がある。慣れればシステムで設定されている『索敵』スキルよりも優秀で、ソロプレイヤーならば必須に近いシステム外スキルであった。

特に固有の波長を持つ神器などの上位装備は、知っていれば判別するのは容易い。

優希は僅かな魔力の動きを感じ取る。

小細工なしに、前傾姿勢で正面から突撃してくる人影。

「小細工なしなんです……必要があるとは思えないですけど」
「ええ……いや、ちょっと……」

優希は仕事は終わったとばかりに、後方へと飛び退く。

それも右足をバネにした上にWAによるサポートを加えているとは言え、静止状態から後方へ向かって一気に10メートル以上もある。

その様子を『この場にオリンピック選手がいたら卒倒しそうだな』等と、半ば呆れ気味にどうでも良い感想を抱きながら悠早も後ずさることさらに距離を取る。鼻歌でも口ずさむようにしてキリエの

再詠唱を行うことも忘れない。

攻撃の危険性は減ったと言っても命の安全が確保されているとは言いがたい。

（つて、やっぱりティッシかい！）

後方へと長い黒髪をなびかせた彼女の姿が通りすぎていく。

獣が準備していた全ての魔法弾系の攻撃魔法と触手が、彼女と交差するそのただ一点を目指す。

ほんの数秒にも満たない時間が、スローモーションのように流れていくのを悠早は体感する。

手始めに数本の触手。

それに数十分の1秒という僅かな時間差をつけて、多数の魔法弾と触手が続く。

ゲーム中ではMBM TWにおけるボスマンスター 戦でもなければ見ることが出来ないような、大量の魔法による攻撃が彼女の姿を完全に覆い尽くす。

彼女が攻撃を回避した様子はない。

アスファルトを食い破り、連続で手榴弾が爆発したように大量の粉塵が巻き上がり視界を塞ぐ。

悠早はその光景に、大丈夫だとわかっていても目を閉じてしまう。

「……………」

次の瞬間、レティーシャは平然と獣の目と鼻の先にいた。

彼女はしてやったり、と不敵に微笑む。

光学的な残像を残し、短距離を瞬時に移動し相手を欺く秘技。

彼女達の扱うオリジナルの中でも今のところ最上位に位置する特殊な補助魔法。

『擬似空間転移』

それはWAと結界を応用し、一瞬の間に急加速と急減速を行うことで実現する。

最大で約15メートルの距離を0.1秒程度で移動する事ができると言うモノ。

飛距離がそれほど長くない割には事前詠唱が必要で、消費MPも並の攻撃魔法など目ではないほど多い。そして間に遮蔽物が存在しない状態が大前提であり、万が一にも遮蔽物があった場合には即死しかねないほどの大ダメージを仮想世界では受けていた。何よりも使用を困難にしているのは、開始位置と終了位置、そしてその3次元空間を正確に脳内で思い描く『空間把握能力』が必要である事だと言える。

連続で使えるものではない上に、何かと制約も多い。
それでも不意打ちをするにはもってこいの技。

レティーシャは落下制御をかけながら身を捻り、巨大な鈍器を振りかぶる。

「くたばれ、犬コロ!!」

真紅のエフェクトを纏ったメイス用の単発重打撃『Skullbreaker』が発動する。

神の金属であり、古代金属の最高峰たるオリハルコン。

その独特な青味がかつた銀の金属光沢を放つ十字架の一端がヘルハウンドの左首、脳天へと突き刺さる。絶大な一撃は防御結界、そして大抵の物理攻撃を緩和する体毛も意味をなさず、鋭利なナイフで切り裂くように皮膚を食い破る。それでも攻撃は止まることなく、更に深くへと浸透していく。

肉を切り裂き、頭蓋骨へと達してもまだ止まらない。
骨が碎ける感触。

脳へと達した時点で彼女はようやく攻撃の手を意図的に緩める。
これ以上深くめり込めば、引きぬくことが困難な状況に陥る可能性があると考えてのこと。

左の首は断末魔の悲鳴をあげることすらなく意識が途絶える。

「とらあっ!!」

血に染まったグランドクロスを引き抜き、休む間もなくコンボによる追撃へと移る。

横殴りに頬へとオーバーキルの一撃。

傍から見れば全く意味のない行動に見えて、ゲームシステム上では意味のある行動。

それは単純に『コンボを繋げる』と言う一点においてのみこれは意味がある。コンボはテクニク使用後の規定時間以内に、発動時の体勢などを含めて無理のないテクニクを繋げていかなければいけない。もし規定時間が過ぎればデイレイが始まりコンボは終了する。技を繋げるため、体勢変更のために、それ自体には意味のない攻撃を行うのは割りとよくあることである。

彼女はその勢いに乗せて既に意識のない左首を蹴り飛ばす。

オレンジ色のエフェクトと共に弧を描く3撃目は右の首の顎を挟む。

それで終わることもなく、文字通りに『空中を蹴って』数十センチ飛び上がる。

その間にも鈍器は見事な円を描いて攻撃の初期位置へと戻り、そのまま手負いの右首の眉間へと深々と突き刺さっていく。

顎を砕かれた獣は断末魔の悲鳴をあげることすら叶わず、意識が途絶える。

「よっ……」

レティーシャは満足気な表情と共に、風に乗って軽やかに地面に舞い降りた。

彼女は間違いなく強者であった。

そんな中で、悠早はかなり引き気味な視線を向けていた。

完全に両の首を破壊され息耐えた獣が、頭部から大量の血液を撒き散らしながら地面へと倒れていくのが目に映る。同時に、『システム』がヘル・ハウンドのHP消失を通知してきたことで、戦闘が終了した事を認識する。

それは勿論、声が聞こえたやら、メッセージが表示されたやらと言っわけではない。

ただ何となくそれを認識することができ、それを教えたのがシステムだと言っことが解る。

恐らく、頭の中に情報が流れこんでくると言っ表現が最も近い。

「うわぁ……流石にあれは可哀想になってくるのは気のせい？」

まるで死体に鞭打つように横っ腹に一撃を加えるレティーシャの姿。それを眺めながら、通りの反対側でやれやれと言った様子で肩をすくめている彼女の言葉を思い出す。

『ティッシは大の犬嫌いですからね……犬系のモブには容赦がないんです』

彼は本当にそうだと一人納得していた。

06 (後書き)

ゲームT Wの説明はそのうちします、たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1926z/>

ネトゲエの世界よ、ようこそ！（仮題）

2011年12月23日01時54分発行